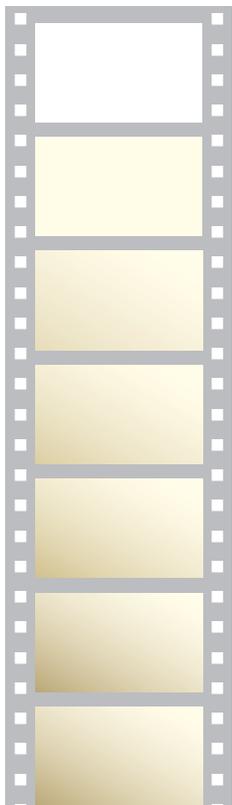
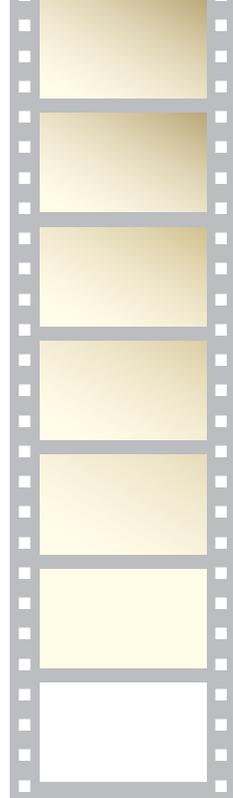


伸^ノさんのシネマトーク

鈴木 伸夫



第六十六回 「アナウンサーへの道」⑥

現在の面接は、個人情報保護法（平成17年4月1日施行）により、様変わりしたと聞きましたが、ぼくたち「団塊の世代」の面接では、制限もなく聞いてはいけないことなどありませんでした。

例えば、現在の面接試験の場合、試験官が受験者の父親の職業を知りたい時、初め受験者に聞いてもいいかどうかの許諾を問い合わせ、受験者が許すとその質問をしても良いことになり、受験者がその質問に答えるシステムの面接だと、実際に面接を担当していた上司が語っていました。

そう言えば、Sテレビの試験官は三人以上いましたが、あとから考えるとずいぶん意地悪な質問をされた記憶があります。

一ヒトとおりの履歴確認のあと「フリートーク」に入りました。ある試験官がぼくに〈A試験官〉「君は全国各地に住んでいるけど、どうしてなの？」

〈伸〉「父がM製菓に勤務しているサラリーマンで、転勤が5年に一度はあったからです。」

〈B試験官〉「現在は仙台に住んでいるんだね。」

〈伸〉「ハイ、そうです。」

〈C試験官〉「仙台から来たんだな。仙台は七夕まつりで有名だ。フリートーク（与えられたテーマに対し、写真を見ながら、自分がその場にいるかのようになりポートすること）で、仙台七夕の中継をやってみたまえ。」

写真もないのに何が仙台七夕の中継だ、それはないだろうと、ムカツとした気持ちになりましたが、目を閉じ、3分間の準備時間をもらって、初めての架空実況中継放送をやりました。

〈伸〉「私は今、仙台市のメインストリート、青葉通りと東一番丁通りの交差する所に立って放送をしています。きょうから始まった仙台七夕まつりは、青森ねぶた祭、秋田竿燈まつりとともに、東北三大まつりに数

えられています……。」

長い3分間でした。目を閉じて想像する練習などしていなかっただけに、冷や汗が出ました。

すると試験官の一人が、

〈C試験官〉「君のアナウンスには、色、イロがないんだよ。色を入れてもう一度、

七夕中継をやって！」

ぼくは同じパターンで中継するわけにも行かず、違うパターンの中継に色をつけて架空のマイクを握ったのです。

(続)

伸

平成25年6月